

「書籍講評」『中東を動かす帰属意識』（林幹雄著、ミルトス、2021年1月28日）

荒涼とした砂漠の景色、遊牧民による伝統的な暮らし。だが、中東地域には、こうしたイメージとは異なる多様な自然、文化、人びとの暮らしが存在する。本書は、長年にわたり商社マンとしてこの地域にかかわってきた著者が固定的なイメージで語られがちな中東地域の実態について解説した入門書である。そして、残念ながら、著者は本書刊行を待たずして逝去されたことから、本作が遺作となった。

本書は三部から構成される。第一部では、アラブ・中東地域を語る上で欠かせない部族とイスラームを扱っている。イスラーム誕生以前のアラビア半島は、多神教の信仰が広く浸透する部族社会であった。だが、七世紀に入り、この地に興った一神教であるイスラームがアラビア半島から東西に広がるにつれて、この地域を取り巻く状況も変化する。本書は、イスラームが興ったアラビア半島の歴史と文化、そしてイスラーム誕生以降の社会的変容について、部族とイスラームを軸に解説している。

アラビア半島に興ったイスラームの信仰は、環インド沿岸や東アフリカにまで及ぶ。第二部では、イスラームの広域的な拡大に貢献したアラブ商人が進出した東南アジアや東アフリカに発展したイスラーム社会について、文献的考察を加えながら解説している。中東から伝来したイスラームが現地社会にどのように溶け込んでいったかが語られている。

第三部は、中東世界に暮らすマイノリティに焦点を当てており、本書の白眉の部分である。ここでは、イエメンに残るシーア派教徒、イラクやその周辺に暮らすクルド人、ヤズィーディー教徒、キリスト教徒、ユダヤ教徒といった民族的・宗教的マイノリティの人びとの暮らしを帰属意識という点から丁寧に記述している。中東地域の民族的・宗教的な多様性について改めて考えさせる内容となっている。

著者は、本書の最終章に湾岸産油国による対イスラエル政策の変化について展望している。パレスチナとイスラエルとの和平交渉が行き詰まるなか、近年、アラブ諸国とイスラエルは外交関係の改善に向けて急接近している。アラブ諸国とイスラエルとの対立は、イスラエルを取り込んだ形での新たな経済圏の構築により、解消に向かうとの期待が本書からうかがえる。

だが、パレスチナの頭越しに進むイスラエルとアラブ諸国との関係改善によって、パレスチナ問題も解決に向かうのだろうか。パレスチナ人、そしてユダヤ人による故郷への強い思いは、まさに著者が着目する帰属意識の高さを示している。中東地域を取り巻く現状を考えると、排他的な帰属意識を乗り越え、共生して行くには依然として解決されるべき困難な課題がある。帰属意識が中東地域を動かす重要な要素であると捉えた本書から学ぶことは多い。

（上山 一、釧路公立大学経済学部準教授）

本書は産経新聞 2月28日の書評欄に書評が掲載されている。

<https://www.sankei.com/life/news/210228/lif2102280014-n1.html>